

総合開館 20 周年記念

荒木経惟 センチメンタルな旅 1971 - 2017 -

ARAKI Nobuyoshi: Sentimental Journey 1971- 2017-

2017 年 7 月 25 日 (火) ~ 9 月 24 日 (日)



〈センチメンタルな旅〉 1971 年 より 東京都写真美術館蔵

展覧会概要

東京都写真美術館は、当館の重点収集作家でもある荒木経惟の展覧会を開催します。

荒木経惟は、1960年代から活動を始め、国内外で高い評価を得ています。荒木の作品は、テーマや手法が多岐にわたることでも知られ、これまでに500冊を超える写真集を出版するなど、その制作意欲は現在もなお、尽きることがありません。

本展は、その膨大な作品群から、妻「陽子」というテーマに焦点をあてた展覧会です。荒木自らが「陽子によって写真家になった」と語るように、1960年代の出会いから1990年代のその死に至るまで、陽子はいちばん重要な被写体であり、死後もなお荒木の写真に多大なる影響を与え続けてきました。

本展では、陽子を被写体とする写真や、その存在を色濃く感じさせる多様な作品を通して、荒木が重要視している被写体との関係性を探り、また彼の写真の神髄である「私写真」について考察していきます。展覧会タイトルの「センチメンタルな旅 1971-2017-」とは、1971年に出版された私家版の写真集に始まり、現在へと続いている荒木経惟の私写真、そしてその写真人生そのものを表しています。

出品予定作品

出品点数 1,000 点超 (予定)

〈愛のプロローグ ぼくの陽子〉 ※世界初公開

荒木が陽子と結婚する以前に撮った作品。ふたりでさまざまなところに旅行した様子や、日常を撮った作品約 100 点を、モノクロ/カラーのポジ原板のまま展示予定。出会ったばかりの陽子の姿、荒木がポジに刻んだ言葉などから、ふたりの愛をストレートに感じることができる。一部を除き、世界初公開となる幻の作品群。



〈愛のプロローグ ぼくの陽子〉
1968-1970 年 より



〈わが愛、陽子〉

新婚旅行の様子と、新婚旅行から帰り荒木と陽子の日常を撮った写真、そして陽子のエッセイをあわせて発表。1976 年、銀座ニコンサロンで個展を開催。78 年に朝日ソノラマから写真集が発行された。ふたりの出会いとも言える電通時代の写真についての陽子のエッセイがある。



〈わが愛・陽子〉 1968-1970 年 より

「物想いに沈んでいる表情が良い、と言ってくれた。私はその言葉にびっくりして、じっと彼を見詰めていたような気がする。その時までの私の世界は、きっと、原色だっただろう。けれど、その原色は渋いニュアンスのある色に変わろうとしていた。一人の男の出現によって、季節がはっきりと区切られていくのを、秘かに自分の心の中に感じていた。私、20 才。彼、27 才。冬の終わり頃だった。」

(『わが愛・陽子』1978 年 朝日ソノラマより抜粋)

〈センチメンタルな旅〉

1971年、1000部限定の私家版として刊行された写真集。妻、陽子との結婚式から、新婚旅行の京都、柳川（福岡）を撮った写真で構成されている。私家版には序文として「私写真家宣言」が挟み込まれている。本展では、東京都写真美術館収蔵のオリジナルプリント全108点を展示する。

前略

もう我慢できません。私の「個性」が「中」で「た」か
らではありません。たまたまファッション写真が氾濫し
ているのにすぎないのです。こうで「くる顔」で「くる裸」
で「くる私生活」で「くる風景」が「嘘」のぼろじや、我慢
できません。これはその頃の「嘘」写真とはちが
います。この「センチメンタルな旅」は私の「愛」で
あり「写真家」決心なのです。自分の新婚旅行を
撮影したから「真実」写真だぞ！と「い」てるのでは
ありません。写真家としての出発を「愛」にし、
たまたま私小説から「は」じま「た」に「し」ぎ「な」いのです。
むしと私の場合「ず」っと私小説になると思「い」ます。
私小説こそ「む」しろ写真に「近」いと思「っ」てるから
です。新婚旅行のコースを「そ」のまま「並」べただけ
です。と「も」なく「ハ」ーツを「ぬ」く「て」み「て」下「さ」し、
古く「お」い「灰」白「色」の「ト」ーンは「オ」フ「セ」ット「印」刷「で」出
しました。よ「り」センチメンタルな旅になりました。
成功です。あなたも「気」に入「っ」て「く」れ「た」は「ず」です。
私は「日」常「の」単「凡」に「し」ぎ「さ」て「ゆ」く「順」序「に」
な「に」か「を」感「じ」て「い」ます。

荷文具
荒木経惟



〈センチメンタルな旅〉 1971年
より 東京都写真美術館蔵



〈東京は、秋〉

電通の退職金で購入したカメラで東京の風景を撮ったシリーズ。1984年に三省堂、1992年に筑摩書房、2016年に月曜社より出版。写真を陽子とふたりで鑑賞し、その時の会話が作品に添えられている。大型プリントを展示予定。



〈東京は、秋〉 1972-73年より

夫■こっちの方を歩いたら絶対に皇居は撮らなきゃいけない。ここは絶対な舞台なわけよ。この前で接吻をした奴がいるとかさ。必ずツアーで記念写真を撮る、その場所なの。撮ってたまたま二人連れが来たわけ。こういう時の女って、とってもワイセツ感というかコケティッシュなところがある、うーん。

妻■これも新婚旅行でしょう。

夫■新婚旅行では、たいてい皇居とか東京タワーを回る。俺はそういうの好きなんだな。これだけ、唯一人をとめて、「撮らせてください」って頼んだ。

妻■これはすごいよね。

夫■説明はうまくできないけど、このなかで一番いい写真だよ。人間が入ることで皇居も生きるし、場所も生きる。街のデコボコ、人間のデコボコ、それが街だね。人間の散らばり具合を撮ってない写真家はダメだね。

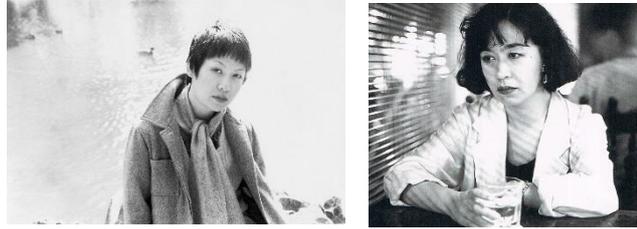
（『東京は、秋』1984年 三省堂より抜粋）

〈陽子のメモワール〉

陽子は荒木の多くのシリーズに登場する。このコーナーでは、〈愛のバルコニー〉（河出書房新社 2012年）、〈ノスタルジアの夜〉（白夜書房 1984年）ほか、陽子をとらえたさまざまな作品を紹介する。



〈愛のバルコニー〉 1985年より



上左〈わが愛、陽子〉 1971-1978年より／上右〈東京ノスタルジー〉 1985-1989年より／下〈わが愛、陽子〉 1971-1978年より



〈食事〉

陽子の手料理を撮り続けた作品。1993年マガジンハウスより出版。当初カラーではじまった写真は、途中からモノクロへと変化する。カラーは生を、モノクロは死をイメージしている。



上下とも〈食事〉 1985-1989年より

9月29日 さしぶりに我が家のすき焼。**10月7日** キリン小びん、梅酒、きゅうりミョーガかいわれゴマサラダ、大トロやまかけオクラのせ、ふるふき大根トリ味噌、わかさぎの唐揚げ、焼き栗とりシメジにんじんの炊き込みごはん、はんぺんとミツバの吸い物、シバ漬。 **10月12日** ぶりの照焼き、ゆで卵とブロッコリー、セロリとキュウリのゴマドレ、ヒジキさつま揚げニンジン、松茸ごはん、お吸物。 **10月20日** にちようびだから、朝から豚汁、うまーい。肉まん二個、てっかんのん。おでん、梅酒、茶めし。 **10月24日** キリン小びん、やまかけマグロ、イモツナサラダ、豚こんにやくシメジかぶの葉っぱ煮、カキフライをS&Bスパイスソース中濃とキューピーマヨネーズとレモンしぼって、菊花かぶ、コシヒカリ。 **10月26日** ヨーコ鍋。 **11月3日** 春菊のゴマよごし、サトイモと豚肉の煮物、子持ちシシャモとシシトウ、サンデーサラダ、鉄火丼、吸い物、ポルドーセック。 **11月6日** 食卓に木瓜、キリン小びん、イカ明太子、梅酒ロック、ブロッコリーきんたまソース、イロイロ串あげニンジンひじきゴマ、大根ぬか漬、LX50 ミリマクロで木瓜の食卓リングストロボEX、フォトビデオに。

（『食事』1993年 マガジンハウスより抜粋）

退院してからは、より愛情こめて料理してくれた。

陽子は知っていたにちがいない、あと1ヶ月の命だとゆーことを。

いままでマクロレンズにリングストロボをつけてカラーで写してたのを、

モノクロームに変えた。テーブルライト1灯、3脚つけて、F32 1秒。

長い1秒のシャッター音 忘れられない。

食事は、死への情事だった。

（『食事』1993年 マガジンハウスより抜粋）

〈センチメンタルな旅・冬の旅〉

1991年2月25日、新潮社より刊行。荒木の写真における最も重要な存在、陽子は1990年1月27日、子宮肉腫のため他界した。42歳だった。写真集は、陽子との新婚旅行を撮影した〈センチメンタルな旅〉より21点、〈冬の旅〉は陽子の死までを記録した写真日記91点で構成されている。32点を展示予定。



病院への近道の石段を
こぶしの花を抱きかかえてのぼった。

〈冬の旅〉 1989-1990年より

写真家だからと言って陽子の遺影をもった。

このポートレイトを生涯私は超えることはできないであろう。

(『センチメンタルな旅・冬の旅』1991年 新潮社より抜粋)

〈空景／近景〉

1991年11月25日に新潮社より刊行された〈空景〉と〈近景〉の2分冊からなる写真集。空の写真は荒木によって着彩されている。「妻が逝って、私は、空ばかり写していた」(〈空景〉より)。〈近景〉はすべて自宅とバルコニーで撮影されたモノクロ作品。ふたりのスニーカーやワイングラス、これまでと何も変わらない風景と、そこに陽子がない喪失感にあふれている。



左〈空景〉 1989-1990年より

右〈近景〉 1990-1991年より

〈遺作 空2〉

陽子の死後も、荒木の写真に陽子は存在する。妻の死に直面し、その悲しみをエネルギーにして写真を撮ってきた荒木が、2008年に前立腺癌を患い自身も死を意識することになる。本作は復帰後に発表した“遺作”で、空の写真に書やペイント、コラージュをほどこした写真日記。2009年1月2日から8月15日までの254点を新潮社から刊行（限定1000部）。年末まで撮影した144点をタカ・イシイギャラリーから刊行。同年12月に個展を開催。本展では15点を展示予定。



生と死がファックしている。
この空を抜ければ楽園があるんじゃないか？

癌という字に酔っているんだよ。
すごくいい線出てるだろ。

西の空は彼岸
枯れている
でも色を忘れない

自分の葬式用の花、撮ってた。
斎場に行くまでの道にずっと、これ100個くらい並べるの。
もう祭壇のレイアウトも考えてあるんだ。
花と花の真ん中あたりに俺の自写像があつてサ。

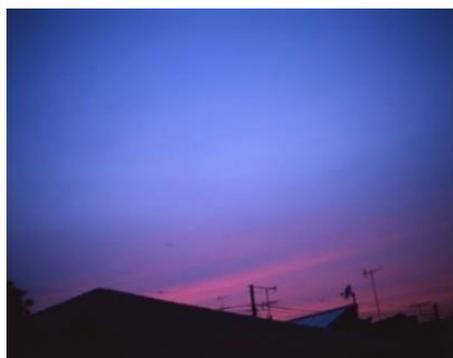
7月7日、結婚記念日。
もし別れても、年に1回は会おう、
セックスしようって
陽子と約束したんだ。
だから、天の川。

（『遺作 空2』2009年 新潮社より抜粋）



上下とも〈遺作 空2〉2009年より

〈三千空〉



陽子が亡くなったあと、空の写真を撮影することが多くなった荒木。本作は、自宅バルコニーから撮影された空の写真ばかりを集めた映像（スライドショー）作品である。3000枚、約4時間の上映となる。

〈三千空〉2012年より

〈写狂老人 A 日記 2017.1.1-2017.1.27-2017.3.2〉 ※新作を初公開

最新作<写狂老人 A 日記>は、2017年1月1日から陽子の命日1月27日、そしてさらに、愛猫チロの命日3月2日までを、本当の日付で撮影した作品。日々さまざまな被写体を撮影している。同時開催中の東京オペラシティ アートギャラリーと連なる作品で、キャビネ判を600~700点展示予定。東京オペラシティの出品作では、すべて結婚記念日である7月7日の日付で撮影している。



すべて 〈写狂老人 A 日記
2017.1.1-2017.1.27-2017.3.2)
2017年より



〈愛しのチロ〉



1988年3月に陽子がもらってきた猫のチロを、荒木はこよなく愛した。陽子がいなくなってからも20年ともに暮らし、2010年3月2日、22歳で大往生。ここでは、陽子の死後に撮ったチロのポラロイド 作品約200点を展示する。

〈愛しのチロ〉1988-2010年より

荒木経惟インタビュー

(2017年5月、インタビュー・文 北澤ひろみ)

一本展のタイトル「センチメンタルな旅 1971-2017-」について伺いたいのですが。

これまでずっと、「旅」っていうものは永遠に続くものだと思ってやってきたけれど、最近ではもうそろそろこの辺りでゴールのテープを切ってもいいのではないかなというような心境にもなっていたところで。それには体力的な面で言えば、癌を患ったことや、片目の視力を失ったことなどがあり、さらにもう十分な評価をもらってきたと思うので、もう写真はいいのではないかなというような感じがしてきたり。そして時折、究極は「書」なんじゃないか、などと敢えて言ってみたりして。そして、人間の心の究極は白黒の濃淡として形あるものであり、書いていて、なんとなく浮かんできた曲線などにあるのかなというようなことを思うような、そういう老境の域に入ってきてしまっていた。

そこに今回の展覧会の話があったので、もうこれで「センチメンタルな旅」を終わらせようかと、タイトルも「センチメンタルな旅。」と、丸をつけて終わらせようという気分もあったが、そのうちに、タイトルの「1971」から棒線を引いて、「2017」の後にも棒線を引いてみたら、なんかまだ続いていくような感じがしてきた。今年はとても多くの展覧会を行うので、これで一気に最後の直線コースかと思ったけれど、まだどんどんその後に続いていくような感じになってきて。少なくともオリンピックの年、80歳になるくらいまでは、続くのかなと思いはじめると、やっぱりまた、次から次へとやりたいことが出てきてしまい、海外から来年の企画が来たりして、やっぱりやめられないのかなあと困っているところで。そんな心境の変化にも影響している訳で、タイトルの最後の棒線「-」は、すごく重要な意味を持っているという訳です。

「センチメンタルな旅」について伺います。昨年、『センチメンタルな旅』の復刻版が発行されて、全108点を写真集として手に取って見るができるようになりましたが、今回の展覧会は、展示空間の中でプリントとして、全点を見られる貴重な機会となりますが、それについてはどのように思われますか。

そうだなあ、まるで回遊魚のように、見る人に動いてもらいながら見てもらうという感じになるのかな。写真の行為っていうのは、見る人がいないと終わらないわけで、撮って見せるというこちらの行為としては、ちょっと未練を引きずって、過去を出している訳なんだけれど、見る人は、そこから自由に未来を作っていくいいわけで、つまり見るという行為から、その先の未来を引き出していくのは見る人に委ねられている。だから一枚の写真っていうのは、未来を予感させるものでもある。それが見ることの魅力であり、写真の魅力であると言えるだろう。つまり、写真というものは、写真家だけの我儘による、個人的なものではないということの意味しているということで、そうして、どんどん変化していくからこそ、写真は面白い。

写真展やるとか写真集出すということは、私の写真を面白いと思って選んでくれて、そしてどこがいいのかを説明して人に伝えて、理解してもらう作業ということで、翻訳、あるいは通訳をしてくれるということだと思っている。要するに、きちんとその時代の人たちが褒めてくれたり、評価を決めてくれたりというようなこと、それが面白いわけ。だからその大変な役割は、一応責任持って果たしてほしい。

—今回の展覧会では、今年撮影された、最新作の〈日記〉も出品され、同時期に開催される「写狂老人 A」展（東京オペラシティアートギャラリー）に出品される〈日記〉と連なるものとのことですが、それについて教えてください。

全て日付を入れて撮っている。先に始まるオペラシティでは、全て7月7日の日付で、7月7日っていうのは、亡き妻、陽子との結婚記念日で、別れても年に一回は、その日に会おうって約束していた日。実は去年からもう全てその日付にして撮り始めていた。だからデジタルより、さらに早いスピードで日付を先取りしていて、それはデジタルに対する揶揄というか、デジタルと勝負しているというような気分で撮っている。両方も600~700点ずつぐらい並べて展示するんだけど、写真美術館では、今年の1月1日から陽子の命日1月27日、そしてさらに、チロ（愛猫）の亡くなった3月2日までを、全て本当に撮影した日付を入れて撮っている。たった一日の中でもヌードとか空、食べ物とか、様々なものを様々に撮っているから、みんな違うわけ。何を撮ってもみんな魅力的に思えるし、ボケたりブレたりしてるものは除こうって時期もあったけれど、今はそうしたのも含めて、全てが素晴らしく見えてくる。カメラのフレーミング自体に入ってきたものが自分のパラダイスっていうような気分になってきていて、方法とかそういうものじゃないんだよ、そういう時期に来ていると感じている。目下の心配事は、天が与えてくれた才能を使い切れるかどうかってことぐらいかな。ハ、ハ、ハ。

—いろいろと興味深いお話をありがとうございました。

まだ何も言ってないんだけどね。そうだな、まあ「写真元気！」とか書いてくれりゃあいいよ。

展覧会図録への寄稿より

荒木さんが「私写真」と呼ぶことには、一種のレトリックもあるのだろう。しかしながら、荒木さんは実にストレートにそれを表していて、『センチメンタルな旅』でも、それをサラッとやってのけていると思った。それはヌードを撮ろうが、何を撮ろうが、現在に至るまで一貫して変わっておらず、そこにあざとさや作為は見られず、コンセプト云々ではなく、またアートでもない。あくまで写真そのものである。（森山大道）

ある日出会い、愛し合い結ばれる。ごく普通に幸福な夫婦生活を送る。のとはやはりどこかが違う関係としての2人。写真家とその妻はいくらだっているが、荒木経惟と陽子夫婦は違うのだ。陽子さんは被写体として妻を演じるのではなく、荒木さんに撮られることによって自分を発見していった人ではないか。（石内都）

写真はノスタルジーでもメランコリーでもなく、不可思議な時間認識へ人を導くセンチメンタルな装置である。そのたびごとに、ただ一つの世界が終焉する。写真は写真を撮る者に、それぞれ固有の喪の体験を通過させる。そのたびごとに、私が生きていられるのは私を支える死のおかげであることを感知する。（伊藤俊治）

展覧会図録

『荒木経惟 センチメンタルな旅、1971-2017-』

東京都写真美術館編集/HeHe 発行

テキスト執筆 笠原美智子、北澤ひろみ/エッセイ 石内都、伊藤俊治、古屋誠一、吉増剛造、森山大道、ユルゲン・テラー、フィリッポ・マッジア等

関連イベント

関連トーク「22世紀アラーキー論 -ずっとセンチメンタル-」

出演 伊藤俊治(美術史家・東京藝術大学教授)、斎藤環(精神科医)、北澤ひろみ(本展ゲスト・キュレーター) 司会 藤村里美(当館学芸員)

日時 8月6日(日) 14:00~16:00 東京都写真美術館1階ホール

朗読会+トーク

荒木経惟の作品についての詩を作者自らが朗読します。

出演 吉増剛造(詩人)、朝吹真理子(作家)

日時 9月16日(土) 14:00~16:00 東京都写真美術館1階ホール

トークは各回とも

定員 190名(整理番号順入場/自由席)

入場料 無料/要入場整理券(当日10時より1階ホール受付にて入場整理券を配布)

ゲスト・キュレーター/当館担当学芸員によるギャラリートーク

会期中の第2・4金曜日14:00より、ゲスト・キュレーター/担当学芸員による展示解説をおこないます。

展覧会チケット(当日印)をご持参の上、2階展示室入口にお集まりください。

開催概要

主催：公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館/産経新聞社

協賛：東京都写真美術館支援会員

会場：東京都写真美術館2階

開館時間：10:00-18:00(木・金は20:00まで)ただし、7月20日(木)~8月25日(金)の木・金は21:00まで
開館 ※入館は閉館の30分前まで

休館日：毎週月曜日(月曜日が祝日の場合は開館、翌平日が休館)

観覧料：一般900(720)円、学生800(640)円、中高生・65歳以上700(560)円

※()は20名以上の団体料金 ※小学生以下および都内在住・在学の中学生、障害者手帳をお持ちの方とその介護者は無料 ※第3水曜日は65歳以上無料 ※ただし、7月21日(金)~8月25日(金)の毎金曜日18:00-21:00はサマーナイトミュージアム割引(一般720円/学生・中高生 無料/65歳以上560円 ※各種割引の併用はできません)

| 荒木展を一度に楽しめる! | 東京オペラシティ アートギャラリー「荒木経惟 写狂老人A」との相互割引
東京オペラシティ アートギャラリー「荒木経惟 写狂老人A」(7/8-9/3)の入場券をご提示いただくと、本展入場券が団体料金になります。また東京オペラシティ アートギャラリー「荒木経惟 写狂老人A」へご入場の際に本展入場券をご提示いただいた場合も団体料金になります。(他の割引との併用不可、ご本人様1回限り有効)

東京オペラシティアートギャラリー <https://www.operacity.jp/ag/03-5777-8600> (ハローダイヤル)

このリリースのお問い合わせ先

このリリースに掲載されている図版（参考図版を除く）をデータにてご用意しております。
掲載をご希望の際は、下記広報担当までご連絡ください。

なお、掲載点数が1点の場合は、展覧会メインイメージとして、本リリース1ページ目の
〈センチメンタルな旅〉1971年より東京都写真美術館蔵 をご提供させていただきます。
〈センチメンタルな旅〉以外の作品は、すべて作家蔵です。

図版をご掲載の際は、必ず作品キャプションおよびクレジットの表記をお願いします。
図版のトリミングはできません。

〒153-0062 東京都目黒区三田 1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 東京都写真美術館
1-13-3 Mita, Meguro-ku, 153-0062, Tokyo, Japan

Tel 03-3280-0034 Fax 03-3280-0033 <http://topmuseum.jp>

展覧会担当 北澤ひろみ（ゲスト・キュレーター）

藤村里美（当館担当学芸員） s.fujimura@topmuseum.jp

広報担当 久代明子 平澤綾乃 前原貴子 press-info@topmuseum.jp